

聴覚障害者への日本舞踊普及

—技能習得上のハンディ克服
のための試作—

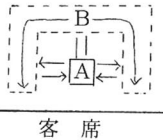
長崎 由利子

〈目的〉

聴覚障害者に日本舞踊を普及することは大きな意義があるが、技能習得のうえで克服しなければならない点もいくつかある。そこで、本発表では聴覚障害者が日本舞踊の“間”のとり方（曲との合わせ方）を習得するための方法を模索する。

〈方法〉

- ①. 音を聞いて“間”をとる通常の聴覚的方法に代って、聴覚障害者が他の人の指示動作を見ながら自らの舞踊を展開していく視覚的方法にするために、舞台上で聴覚障害者の踊り手をAとし、このAから見える範囲である点線で示したゾーンに動作の指示を送る健常者Bを「舞踊指揮者」として設定する(右図参照)

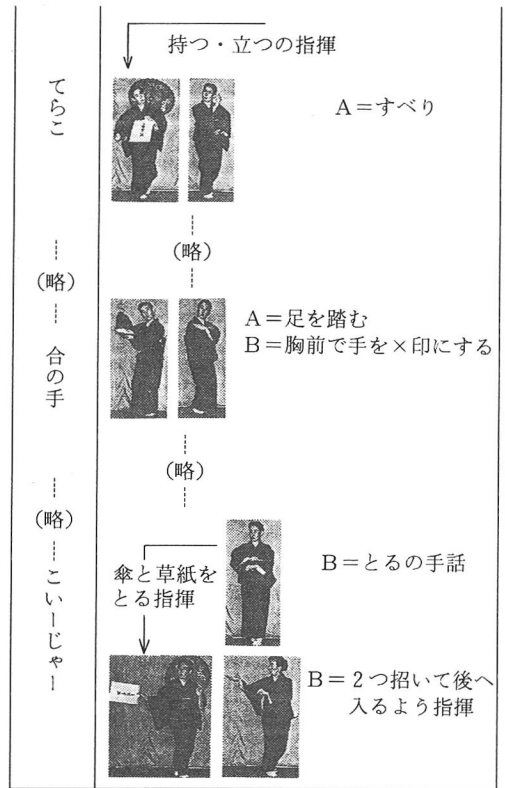


- ②. 「舞踊指揮者」(B)と聴覚障害者(A)との間で日本舞踊の各動作の指示のための凡例を作成し(たとえば、前を向く、持つ、立つは、手話を使用する・足を踏む時は胸前で手を×印にする・後へ入る時は招く等)、それを円滑に運用できるように訓練する。
- ③. ②を踏まえて、長唄「手習子」の冒頭部分を使用して、「舞踊指揮者」(B)の指示のもとで踊る聴覚障害者(A)のための日本舞踊を試作する。

(試作)

長唄「手習子」冒頭部分

詞章	〈舞台展開〉 左=A(聴覚障害者)右=B(舞踊指揮者)
かわゆらし	<p>幕明きのポーズ(板付) A=後向き B=前向き</p>
あかぬながめの	(略)
...	...
...	...
...	...
むすめ	<p>B=持つ+立つの手話</p>



- ④. ①～③の方針で試作する場合、最も重要な問題は「舞踊指揮者」の存在をどう位置付けるかである。観客の側に立った時、「舞踊指揮者」が単に聴覚障害者に“間”のとり方を指示するだけの号令係で、舞台の雰囲気をこわす不粋な存在に見えてはいけない。そこで、「舞踊指揮者」も日本舞踊を習得している者を配し、指揮をする曲に相応の衣裳も着用する。とくに、曲の経過の中で次々と動作を指示していく「舞踊指揮者」自身の動作にも、腰を入れる・肩を落とす・袖を持つ等の日本舞踊の基本技能をとり入れて美感を出すことがポイントである。

〈結果〉

「舞踊指揮者」の動作もひと工夫することで日本舞踊の一部のように見え、違和感を払拭できる。つまり、「舞踊指揮者」と聴覚障害者が一体となって一つの舞台上で共に日本舞踊を踊っている形になるわけである。それによって本試作は、「舞踊指揮者」と聴覚障害者のペアによる組踊りの一形態のようにとらえることが可能になる。

〈考察〉

「舞踊指揮者」(健常者)と聴覚障害者がペアになることは、聴覚障害者のハンディ克服のための手段であるばかりではなく、本試作を通して両者の間にコミュニケーションの場を提供することができる。また、健常者同士で踊っても組踊りの新趣向として意義がありはしないだろうか。